

主題分析を中心とした選択体系機能 文法の英語教育への応用

佐々木 真

愛知学院大学短期大学部研究紀要 第9号抜刷

平成13年(2001年)3月31日 発行

主題分析を中心とした選択体系機能 文法の英語教育への応用

佐々木 真

要 旨

本論は学生の書いた英作文を評価する上での指標を提起する。ここでは節の冒頭に着目して接続詞の有無、主題部の種類を分析した。その結果、独立節の冒頭に接続詞を多用するものとそうでないもの、また主題部に参与要素を多用するものと、付加詞を用いるものがあることが分かった。前者は節複合の作成能力に関与し、後者は作文のテキスト構成的機能に関与する。これらの指標はすでに佐々木（2000）が提起した他の評価指標と組み合わせることにより学生の作文能力を簡便にしかも客観的に浮き彫りにできると考えられる。

はじめに

本論は昨年発表した論文「選択体系機能文法の英語教育への応用：節と過过程中核部の分析による作文の評価」(佐々木 2000) の補完である。先の論文では教養課程の学生が提出した英作文のレポートを分析し、作文評価の指標となるべき点として、節の数、節で用いられている過过程中核部の種類に着目した。その結果、英作文の表現能力が高い学生では(1)使用される節の数が多い、(2)独立節だけではなく、依存節が多く使用される、(3)使用される過程型の種類が豊富であるという結果が導き出された。反対に表現能力の低い学生は節の数が少なく、その多くが独立節だけであり、また節を組み合わせた節複合をあまり使えないことが明らかとなった。

これから分かるのは学生がどのように語彙を節構造の中に入れているかという点であり、さらにそれらの節をどのような論理構造で接続しているのかということである。また過过程中核部で使用される過程型の種類を調べることもそれらの能力を測定していると言えるだろう。換言すれば選択体系機能文法で想定する3つのメタ機能のうち観念構成的機能についてのみ焦点を当てた分析といえる。

しかしながら実際のテキストは文化的状況や場面状況などが相互作用を引き起こした結果算出されるもので、一元的な側面だけをもってその評価をすることは不十分である。なおかつ残りの対人的機能、テキスト形成的機能の観点から分析しなければテキストの本来の評価は不可能であろう (Halliday 1994, 山口 2000)。

今回はこの前回の知見をさらに検証するために、先に挙げた3つのメタ機能の中からテキスト形成機能に焦点をあて、この機能に関係の深い主題構造の観点から分析を行った。具体的にはどのように節をはじめめるのか、そしてどのような主題を選択してテキストを形成しているのかを中心課題と位置づけることにした。

データ

データは佐々木（2000）で用いられているものと同じもので、1998年度に愛知学院大学教養課程の「英語 Ic」（担当者：佐々木真）を履修した文学部学生 2 年生が提出した作文 30 例である。タイトルのみを“My Plan for the Summer Vacation”と限定し、枚数については上限、下限とも設定していない¹⁾。

これらの課題は前期試験レポートとして与えられたもので、必ずワープロかあるいはタイプライターを使用することを義務づけた。学生には準備期間を含め、3 週間の時間があった。

分析方法

データごとにすべての節を同定し、そこに使用されている主題部を抽出した。分析の枠組みとして Halliday（1994）を適用し、主題部が多重主題になっているものについてはテキスト形成的主題、対人的主題、話題的主题に分類した。

学生の作文を評価していると次の例のように節頭に and, so, because などの接続詞を多用するものがあることに気づく。

In July, I must take many test in university. But I finished it in safety. So, I'm looking forward to summer vacation. And I have a plan in summer. To be exact, I have two things what I want to do in summer

At first I want to have part-time job. That is, I'd like much money. Because I had a driver's license in March. So, I want to have a car. And I would like to go to school by car every day. And I'll go to the place where I want to go. In addition, I want personal computer, television an air conditioner. My room doesn't have them. So, I don't feel comfortable.

At second I want to study English very hard. Because I'm planning to study English in United Kingdom or Australia or United States next summer. That is, I

want to become a English teacher in high school. And I'd like to teach students that English has attractiveness and pleasure. So, I'll experience the Native Speaker's voice. And I also want to learn their culture.

The above is my plan for summer vacation. I want to have part-time job and study English so hard. And I will spend my all time to do it. And I will play with my friends and go to Tokyo for pleasure. As a result, I'd like to make good use of my summer vacation.²⁾

依存節において接続詞から節を始めることは何らの問題もないが、学生は単独の独立節においても *and* や *but* から始めることが多い。たしかに話し言葉であればこのような接続詞で節を始めることに違和感はない。しかし書き言葉として表記する場合はいささかくどいと感じるのではないだろうか。またライティングのテキストではこれらの接続詞から文を書き始めてはいけないという指示がある^{3) 4)}。そこでこのような接続詞の使用を顕在化させるために特に主題部のテキスト的主題の中から接続詞に焦点をあてて分類をした。

従って分析では(1)節における接続詞の有無、(2)接続詞が使用されている節が独立節であるか、依存節であるかの同定、(3)主題の同定とその節構成上の機能の分類、すなわち参与要素かあるいは付加詞かに着目した。

表-1 分析例

conj	theme	theme anlys	No.	CLS
	I	p	1	ind
	I	p	2	ind
	I	p	3	ind
	We	p	4	ind
	The participants	p	5	ind
	We	p	6	ind
	Incidentally	a	7	ind
	This	p	8	ind
	My friend	p	9	ind

分類された項目は次のように表としてまとめ、その数を記録した。次にあげるのはその分析例である。それぞれの節に conj (接続詞), theme (主題), theme anlys (主題が p (参与要素) かあるいは a (付加詞), CLS (独立節か依存節か) を分類した。

分析と考察

分析の結果、独立節にどのように接続詞を使用しているのか分類することとした。つぎにあげる表2はその結果である。

表-2 独立節とそこで使用される接続詞

Data No	Indep. Cls	Conjunction	%
Data 1	50	7	14.0%
Data 2	38	10	26.3%
Data 3	26	3	11.5%
Data 4	29	11	37.9%
Data 5	29	5	17.2%
Data 6	33	13	39.4%
Data 7	32	3	9.4%
Data 8	21	5	23.8%
Data 9	25	14	56.0%
Data 10	18	6	33.3%
Data 11	37	11	29.7%
Data 12	39	7	17.9%
Data 13	29	10	34.5%
Data 14	43	9	20.9%
Data 15	17	4	23.5%
Data 16	19	9	47.4%
Data 17	43	11	25.6%
Data 18	23	3	13.0%
Data 19	27	5	18.5%
Data 20	40	4	10.0%
Data 21	45	25	55.6%
Data 22	27	11	40.7%
Data 23	14	1	7.1%
Data 24	29	7	24.1%
Data 25	45	3	6.7%
Data 26	22	5	22.7%
Data 27	28	6	21.4%
Data 28	34	9	26.5%
Data 29	52	8	15.4%
Data 30	33	8	24.2%
Average	31.57	7.77	25.2%

この表によれば独立節の半分以上に対して、接続詞を使用している学生がいることがわかる。たしかに節等位関係で結びつける場合には **and**, **but** などの接続詞が使用されるので、独立節であっても節頭に接続詞が用いられるケースがあるのは当然である。しかしながらある程度の割合を越えるというのは節複合ではなくても節頭を接続詞から始めるということが考えられる。そこで、表2において独立節で使用される接続詞の割合をみると **Data9**, **Data16**, **Data21** はその割合が45%以上に達する。また **Data6**, **Data22** についてもその使用率は40%前後となっており他のデータに比べると高いと言えるだろう。実際に先に引用した作文例をもう一度みてみよう。これは **Data9** の作文である。主題部の接続詞を健在化させるために太字斜体で表記する。

In July, I must take many test in university. **But** I finished it in safety. **So**, I'm looking forward to summer vacation. **And** I have a plan in summer. To be exact, I have two things what I want to do in summer

At first I want to have part-time job. That is, I'd like much money. **Because** I had a driver's license in March. **So**, I want to have a car. **And** I would like to go to school by car every day. **And** I'll go to the place where I want to go. In addition, I want personal computer, television an air conditioner. My room doesn't have them. **So**, I don't feel comfortable.

At second I want to study English very hard. **Because** I'm planning to study English in United Kingdom or Australia or United States next summer. That is, I want to become a English teacher in high school. **And** I'd like to teach students that English has attractiveness and pleasure. **So**, I'll experience the Native Speaker's voice. **And** I also want to learn their culture.

The above is my plan for summer vacation. I want to have part-time job and study English so hard. **And** I will spend my all time to do it. **And** I will play with my friends and go to Tokyo for pleasure. As a result, I'd like to make good use of my summer vacation.

このデータでは節頭に使用されている接続詞は先行する節と節複合を構成しておらず、単独の節として機能しているものに使用されている。すなわち文頭に接続詞が多用されている。このデータの場合は特に and と so で先行する情報に次の情報を付加することが顕著に現れていると言える。また because を節頭において節を始める傾向にあることがわかるが、これは中学以来 why で始まる疑問文に対する返答を because で始めるということが強調され、理由を導く際の接続詞としての用法に慣れていないということが考えられよう。

反対に接続詞を節頭に用いないものもある。Data7, Data23, Data25 においてはその使用率が10%以下となっている。次の例は Data23 の作文であるが、節頭に接続詞をほとんど用いていない。

I am looking forward to my summer vacation. I will go to a driving school in this summer. I will enjoy with my club members in Nagano. This club is a psychology club. I am going to return to my hometown, Kanazawa. I hope to have a party with my friends in there. From there, in addition to, I will go to Wazima to join another club. This club is a Karate team. In there, I will play a Karate for six days. I will have to have a experiment of a psychology for a AGU festival. The theme of the experiment is confidence in social. I hope that the experimet will succeed.

I want to do something else, going to swim in pool or sea, having some parties, going to play in many places, playing many sports, and studying a psychology and a philosophy, but, I am most interested in many encounter with various people in this summer.⁵⁾

この例では節頭に接続詞が現れるのは最後の節の but だけで、これも節複合の中で使用されているために、まったく違和感を与えない。したがって、この指標から独立節の節頭での接続詞の使用率の低いものは評価を高くし、逆に使用率の高いものは評価を低くすることができると仮定できるであろう⁶⁾。

次に主題部において使用される主題がどのようなものを分析した。すなわち主題部において過程部を構成する参与要素が主題として使われるのか、あるいは節を修飾する副詞や法性に関わる付加詞が使用されるのかということである。次の表3はその分析結果である。

表-3 主題部の種類とその割合

Data	Participant	P(%)	Adjunct	A(%)	T-Unit Total
Data 1	47	88.7%	6	11.3%	53
Data 2	31	79.5%	8	20.5%	39
Data 3	22	78.6%	6	21.4%	28
Data 4	20	74.1%	7	25.9%	27
Data 5	22	73.3%	8	26.7%	30
Data 6	28	84.8%	5	15.2%	33
Data 7	23	79.3%	6	20.7%	29
Data 8	19	90.5%	2	9.5%	21
Data 9	18	69.2%	8	30.8%	26
Data 10	17	77.3%	5	22.7%	22
Data 11	34	82.9%	7	17.1%	41
Data 12	29	65.9%	15	34.1%	44
Data 13	25	71.4%	10	28.6%	35
Data 14	38	70.4%	16	29.6%	54
Data 15	15	75.0%	5	25.0%	20
Data 16	16	94.1%	1	5.9%	17
Data 17	32	76.2%	10	23.8%	42
Data 18	15	75.0%	5	25.0%	20
Data 19	20	71.4%	8	28.6%	28
Data 20	40	81.6%	9	18.4%	49
Data 21	49	87.5%	7	12.5%	56
Data 22	27	93.1%	2	6.9%	29
Data 23	13	86.7%	2	13.3%	15
Data 24	27	81.8%	6	18.2%	33
Data 25	40	80.0%	10	20.0%	50
Data 26	14	63.6%	8	36.4%	22
Data 27	19	79.2%	5	20.8%	24
Data 28	29	80.6%	7	19.4%	36
Data 29	49	87.5%	7	12.5%	56
Data 30	25	67.6%	12	32.4%	37
Average	26.57	79.9%	6.83	20.1%	33.40

この表によるとデータの多くが主題部に参与要素を使用している。具体的には作文の主体である“*I*”がその多くを占めている。次にあげる例は Data 16 の作文である。ここではほぼすべての主題部に参与要素が使用され、付加詞は 1 つしか用いられていない。

Main event of this summer vacation is to take part in “Ultra Quiz”. I have wanted to go this event since high school age. So I am looking forward to go and studying quiz now.

Second event is to cycling. I have ever done cycling from Aichi to Kyouto about 200km. So I will run more longer from Aichi to Hokkaido. But that is schedule, I don not know how long run.

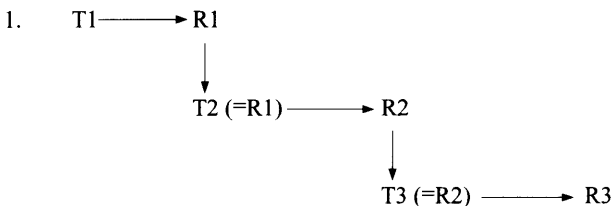
And 14 August is my birthday. I am twenty-one this year. The day is assembly to play every year with my friends of primary school age.

And I want to trip country there can play free with my friends by car.

But I will not play only. I will study or read books and I will study to get capacity, for example TOEIC.

I want to make my summer vacation fun.

多くの作文では人称代名詞、あるいは先攻する事象を示す指示代名詞が主題部として使用される傾向にある。もちろんこの例でもそうだが、一連の主題部として“*I*”が取り上げられると、そこに主題部間のつながりが発生するために一応のテキストの結束性がうまれると考えられる。たとえば次の図はテーマ展開の図であるが、この中の図で言えば、2 のパターンに相当するだろう。



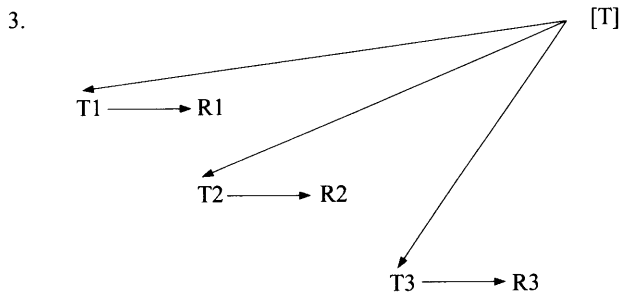
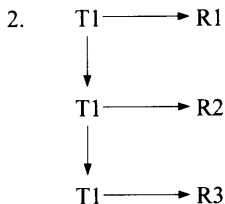


図1 テーマ展開のパターン

しかし、あまりに“I”を主題とした節が続くものではあくまでも自分主体の記述に限定され、表現力に乏しいと考えることもできるのではないだろうか。これは先の論文（佐々木2000）でも指摘したことだが学生が英文を一文ずつ箇条書きにして書くことと関連があるのではないだろう。すなわち箇条書きにするかわりに独立した節をそのままつなげているだけで全体の構成をつくることができない可能性がある。

反対に付加詞を多く使う作文ではどのようになっているのであろうか。次の例は Data12 のものである。表3においては2番目に多く付加詞を使うわりあいが多い。ここでは顕在化のために付加詞の主題部を太字で表記する。

In this summer vacation, I make up my mind. I am going to take a plane. I have never taken a plane. Because I am scared of a airplane crash. Such my plan for the summer vacation is overseas trip.

That is my first visit to the foreign countries. Destination is the Europe. I will visit there on a group tour with my friend. We are planning to tour London, Paris,

Rome and Geneva for 11 days. **Now** I shall introduce my schedule.

First day, I will leave for London from Nagoya airport by airplane. **The next day**, we are going to go sightseeing in London. **Third day**, we will leave London for Paris by the Eurostar. **Besides**, we will travel in the first class. The schedule of fourth day is the sight of the Paris. We are going to see the triumphal arch, the Eifel Tower and some art museums. **At the lunch** we are plan to eat escargot. My friend says “I can not eat KATATSUMURI. So, when I eat escargots, I am consider them to be shellfishes”. But I think she should see the truth. And my schedule of this day is quite tight. We are going to go out to see the Versaille Palace. I am looking forward to seeing this palace. **Especially** I would like to see the room of mirrors. Because I major in European and American history at the university. **Particularly** I want to major in history of France. **Moreover**, I think it is so beautiful. **Afterward**, we are going to visit the places of scenic beauty and historic interest in Rome. And we will go to see the sights at ninth day. I am going to take a ropeway. **In fact**, I would like to take a moutain railroad train. **To my regret**, my tour’s plan does not contain to take this train. **However**, we can see the panoramic view of the Alps from observation platform. **Maybe** the scene will move us. **Last day**, I will really hate to part but I am going to return to my mother country.

That is my plan for the summer vacation. I am very excited. But I feel anxious about my travel. Because both of us do not good at English. I wish I could speak English fluently.⁷⁾

Data12では付加詞を主題部にとる場合に時空間に関する状況的要素、あるいは自分の主観的判断を示す法制要素を使用している。必ずしもこれらの要素を主題部に使用することがいいとは言えないものの、夏休みの出来事を記述するという一種のナラティブジャンルの特徴がこのような主題部の取り立てにあらわれていると言えよう。また時空間に関する付加詞を主題部にたてることによって、出来事の流れがより鮮明に描写されているし、さらにその出来事が自分にとってどのような意味をもっていたのかも浮き彫りになっている。すなわち、テキスト構成的機能と

いう観点からすると、主題部にある程度の付加詞を取り上げる作文では節と節との照応関係が明確になり、全体の首尾一貫性が高まると仮定できるのではないだろうか。

結論

本論では簡単に節の主題部に着目して独立節の節頭に接続詞が使用されているかどうか、そして節の主題部に参与要素と付加詞のどちらが使用されているかという分析を試みた。この分析の結果、節頭に接続詞をあまり使用しないもの、主題部に付加詞を用いるものの評価を高くすることができ、反対に接続詞を節頭に多用するもの、主題部に参与要素ばかりをたてるものは評価が低くなると仮定することができる。

ただしこの仮定もかなり極端なものであることは確かで、これによってすべての能力を評価しようということではない。あくまでも英作文の構成力を評価する基準の一つになるのではないかという提起である。この基準は先に佐々木（2000）で提起した節の数と種類、過程中核部の数と種類という他の評価指標と組み合わせることでさらに明確に評価を下すことができよう。

たとえば、データの全てに対して先の4種類の指標に加え、今回提起した主題部の評価指標を合わせた合計6種類の項目で評価を行うこととしよう。それぞれの指標項目で評価の高いとされるものを20%ずつ選び、あるデータがそれらの選出項目の中に入っているかということが考えられる。すなわち Data 1 がこれら6種類のうち3種類の項目で高いと評価されれば、ある程度の信頼性をもって、評価を高いとすることができる。また評価の低いものに対しても同様のことが言えるであろう。実際に Sasaki（2000）ではシドニー大学で開催されたワークショップにおいて、参加者らにデータを A, B, C という単純な3段階で評価をしてもらったところ、その結果は上記の6種類を応用した評価の結果と合致した。このことから単純ながらのこれらの指標を応用することにより自由英作文の評価は単なる主観的なものではなく、いかに節を構成し、それを配置

するかという客観的なものとなると考えられる。

参考文献

- Fries, P. (1995) "A personal view of Theme," in *Thematic Development in English Texts*, ed. Mohsen Ghadessy, London: Pinter
- Halliday, M. A. K. (1994) *Introduction to functional Grammar*, 2nd ed., London: Edward Arnold.
- 伊藤健三, 島岡丘, 村田勇三郎 (1982) 『英語学と英語教育』, 英語学大系第12巻, 東京: 大修館書店
- Sasaki, M (2000) "Applying Systemic Functional Grammar to Evaluating the Writing of EFL.": (workshop) at *Workshop 2000: Language, Text and Culture in the Global Context*, University of Sydney, Sydney, Australia
- 佐々木真 (2000) 「選択体系機能文法の英語教育への応用: 節と過程中核部の分析による作文の評価」
- 山口登 (1998) 「英語における節の主題: 選択体系機能理論におけるメタ機能の視点からの再検討」, JASFL Occasional Papers 1: 1
- Thompson, G. (1996) *Introducing Functional Grammar*, London: Arnold
- 山口登 (2000) 「選択体系機能理論の構図」, 『言語研究における機能主義』 (小泉保 編) 東京: くろしお出版

註

- 1) データについての詳細は佐々木 (2000) を参照のこと。
- 2) スペルの間違いなどは学生によって提出されたオリジナルのまま。
- 3) 一例として, Olsher (1996) *Words in Motion*, Oxford: Oxford University Press がある。
- 4) もちろん単純に書いたものだから, 話されたものだからという物理的媒体によって, 節頭の接続詞の有無を論じるのは早計で, テキストが使用される状況, 目的という使用域 (レジスター) によってその妥当性は変化する。
- 5) スペルの間違いなどは学生によって提出されたオリジナルのまま。
- 6) だからといって, この指標だけで Data23 の作文が良いと評価するわけではない。
- 7) スペルの間違いなどは学生によって提出されたオリジナルのまま。